

信念の獲得と探究の継続はいかにして両立するか

阿部裕彦 (Hirohiko Abe)

慶應義塾大学

現代認識論では、とりわけ 2000 年代以降、C. Hookway や J. Friedman、C. Kelp らをはじめ、「探究 (inquiry)」という活動が注目されている。われわれは、積極的になにかを行うことなく受動的に知識を獲得することもあれば、特定の事柄について知るために積極的に調べることもある。例えば、通学のために商店街を歩いているとき、パン屋のシャッターが下りているのをたまたま目にして、「今日はパン屋が閉まっている」という知識を得ることがある。こうした事例は前者にあたる。他方、後者にあたる例は次のようなものである。まず、今日はパン屋が開いているだろうかと疑問に思う。その疑問に答えるために、一昨日ポストに入っていたパン屋の広告を引っ張り出し、水曜日が定休日であるという記述を見る。さらに、スマートフォンを開いて今日が水曜日であることを確認し、「今日はパン屋が閉まっている」という知識を獲得する。この場合の主体は、知識を得るために積極的に活動していると見なすことができる。知識を得るためのこのような活動が探究と呼ばれる。

探究は、問いを適切に決着させるための活動だと理解されている。すなわち、探究は、ある問いへの答えを適切な仕方を与えるための活動として考えられる。先程の例では、パン屋が今日開いているかどうかという問いを適切に決着させることが探究の目的である。今日はパン屋が開いているという信念や、今日はパン屋が閉まっているという信念が獲得されたとき、今日はパン屋が開いているかどうかという問いは決着する。より一般的に言えば、 p か p でないかをめぐる探究は、 p という信念や p でないという信念が獲得されたときに決着する。さらに、決着までの過程が探究に求められる規範に従っていれば、問いが適切に決着したことになる。

ここで重要なのは、主体が p か p でないかをめぐる探究の活動に従事している間、主体は p か p でないかの判断を保留していなければならないという点である。もし主体が p という信念や p でないという信念を持っているなら、 p か p でないかという問いは決着しているだろう。問いが決着しているにもかかわらずその問いをめぐる探究活動を行うことは合理的でないように思われる。

しかし、われわれの日常的な実践の中には、 p という信念や p でないという信念を主体がすでに獲得しているにもかかわらず、さらなる証拠を集めるなどの探究の継続が合理的でありうる場合があると思われる。もっとも、道徳的な理由や実践的な事情のために探究を継続することもあるが、純粹に認識的な事情によって探究を継続することもありうる。

本発表では、 p という信念を獲得しているにもかかわらず p か否かをめぐる探究が継続する事例を検討し、信念の獲得と探究の継続との両立可能性をめぐる問題を定式化する。さらに、信念の獲得と探究の継続がいかにして両立するのかについて、Friedman

や Kelp、Millson、Falbo らによる議論を見ることで、提案されているいくつかの解決策を検討する。これらのいずれの解決策も受け入れがたい帰結を伴うと論じたうえで、最後に、発表者による新たな回答を提案する。

Friedman 2019a では、*p* という信念を持ったまま探究を続けているように見える事例においても、探究の再開に際して、*p* と信じている状態から *p* か否かの判断を保留している状態に移っていると考えられている。Friedman 2019b では、問いへの答えとしてある信念を持つことと、特定の信念に高い信憑性を帰属させることとが区別される。Friedman によれば、前者は探究の間判断は保留されているべきという規範と衝突するが、後者は衝突しない。Kelp 2021 では、*p* という信念や *p* でないという信念を獲得したあとの探究の目的は、*p* か *p* でないかという問いではなく、*p* と確信してよいかや *p* でないと確信してよいかというより高階の問いを目的としていると考えられている。Falbo 2021 では、探究の目的として、知識を獲得して *p* か *p* でないかの問いを決着させることだけでなく、よりよい認識的地位に至ることもあるのではないかという示唆が与えられている。

本発表では、以上の解決策をより詳細に批判的に検討したうえで、信念の獲得と探究の継続を両立させる新たな回答を提示する。本発表では、問いが決着するのは、*p* という信念や *p* でないという信念の獲得によってであるという前提を棄却し、探究の間 *p* か否かの判断は保留されていなければならないという条件を棄却する。より積極的に述べると、問いの決着には、*p* と知っているという信念や *p* でないと知っているという信念が獲得も必要だと考えるべきであると本発表では提案する。つまり、探究を閉じるには、*p* という信念や *p* でないという信念を獲得することに加えて、こうした信念獲得が適切な仕方での決着であるという信念が常に求められる。したがって、*p* という信念や *p* でないという信念の獲得だけでは *p* か *p* でないかをめぐる問いは決着せず、その探究は閉じられない。それゆえ、*p* という信念や *p* でないという信念を持ったまま探究を継続することは合理的でありうる。

参考文献

- Falbo, A, 2021, "Inquiry and Confirmation," *Analysis*, 81(4), pp. 622–631.
- Friedman, J, 2017, "Why Suspend Judging?" *Noûs*, 51(2), pp. 302–326.
- , 2019a, "Checking again," *Philosophical Issues*, 29, pp. 84–96.
- , 2019b, "Inquiry and Belief," *Noûs*, 53(2), pp. 296–315.
- Hookway, C, 2006, "Epistemology and Inquiry: The Primacy of Practice," in Hetherington, S. C. (ed.), *Epistemology Futures*, pp. 95–110, Oxford University Press.
- Kelp, C, 2021, *Inquiry, Knowledge, and Understanding*, Oxford University Press.
- Millson, J. A, 2020, "Seeking Confirmation: A Puzzle for Norms of Inquiry," *Analysis*, 80(4), pp. 683–693.